

ポストモダン

手ぬぐい職人

夏の風物詩でもあったゆかたや手ぬぐい、Tシャツやタオルに押されてずいぶん少なくなつたとはいへ、職人さんたちの手は決して衰えてはいない。しつかりその工程を見せてもらった。

彫師、板場、紺屋と
それぞれがプロフェッショナル

日本橋で有名な問屋さんから紹介され、墨田区の1染色工場にうかがいました。ここは日の前に荒川が見えるところ。昔はどこかの染工場もそうであつたように、川が水もととして大きな役割をしていました。昭和二五年、井戸水を汲み上げることも規制されました。地盤沈下の原因ともいわれたのです。

現在は工業用水道水で工場内で行われています。といっても川の側にある染屋さんでなければ感じがないところが、いかにも伝統の手ぬぐいらしい。

にさまざまな模様があり、柄があり、絵があります。それをきちんと、美しく表現するために、それぞれの専門の職人さんたちによつて仕事が進められていきます。どれ一つもおろそかにできない仕事です。左の写真は明治の頃の手ぬぐい見本帳です。今でいえば、デザイナー、イラストレーターでしょうか。図案師によつて下絵が描かれます。配色を決め形紙の製作になります。形紙は主に美濃和紙に柿渋をひいて、くん製した紙を何年もねかせたものが良質とされています。形紙は今ほとんど紗張といつて、絹糸紗をウルシ張りにしたものを

を裏打ちすることで処理されていますが、この前は「糸入れ」か「糸がけ」といって、くもの巣の如く針糸によつて吊どめしたものが使用されていたのです。それだけに紗張は画期的な考案といわれています。

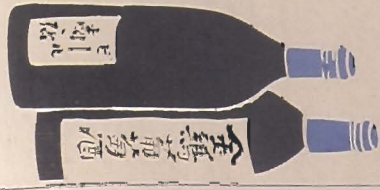
図案形紙ができたとこで染工場にいよいよくるわけです。一枚の形紙を前にこいで板場、紺屋の各職人さんによつて綿密な打ち合わせが行われているのを見ました。一度、打ち合わせに居合わせました。神社に並ぶ灯笼の影ひとつのことでしたが、結果は明瞭に表れ、感心しました。

手

五廿

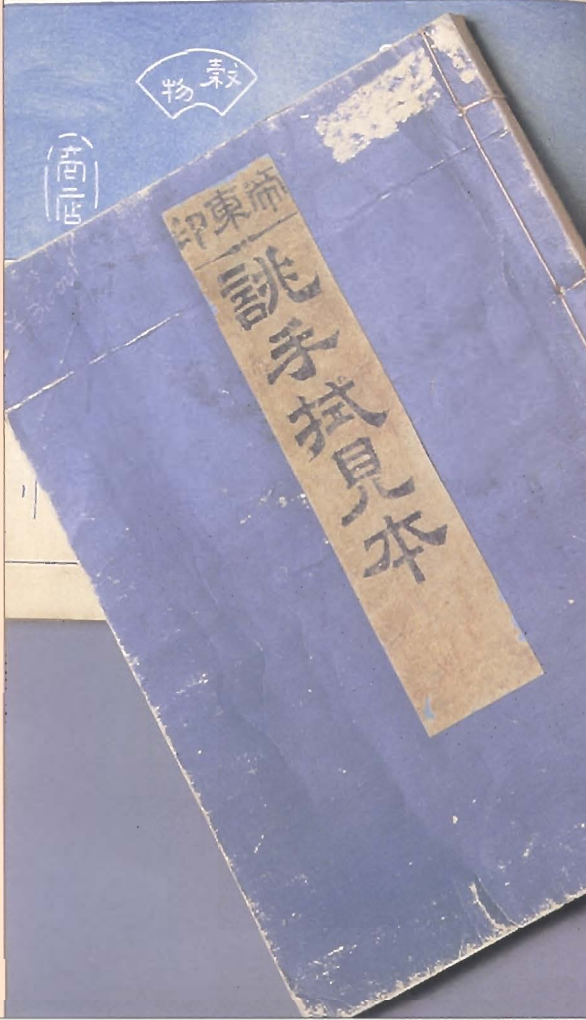


内外両法

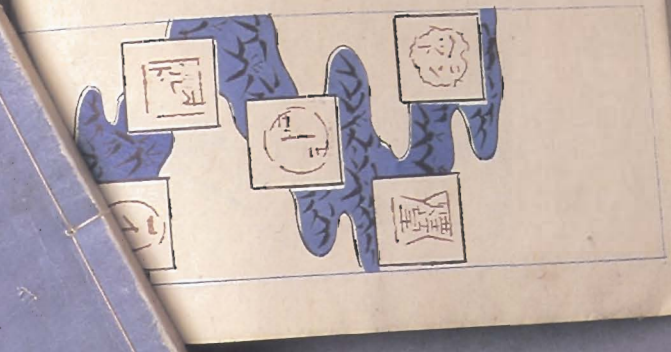


ぬ

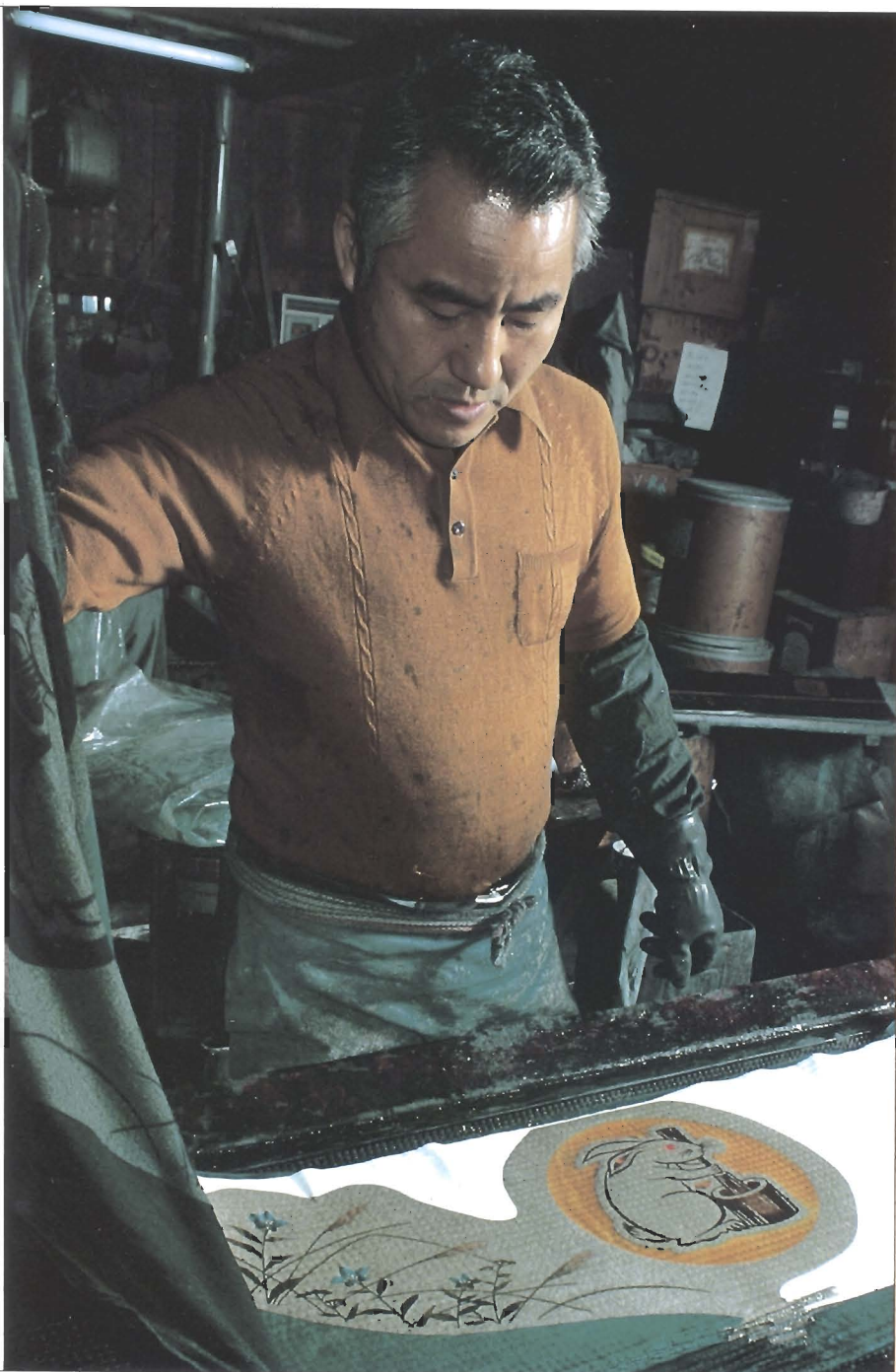
六廿



へ



す



晒を練るのがホント

手ぬぐいといえば晒、晒といえば真っ白な木綿です。銭湯には目の粗い八寸晒、ちよいと粋なものは目の細かいものといわれていたように、生地は番手（ふつうは30番）と幅が用途によって分けられます。手ぬぐいのほとんどを占めているのが、30番手の34cm幅の総理という符丁で呼ばれています。それぞれ、桶、束、とか、いかにもふさわしい符丁がついておもしろいのです。

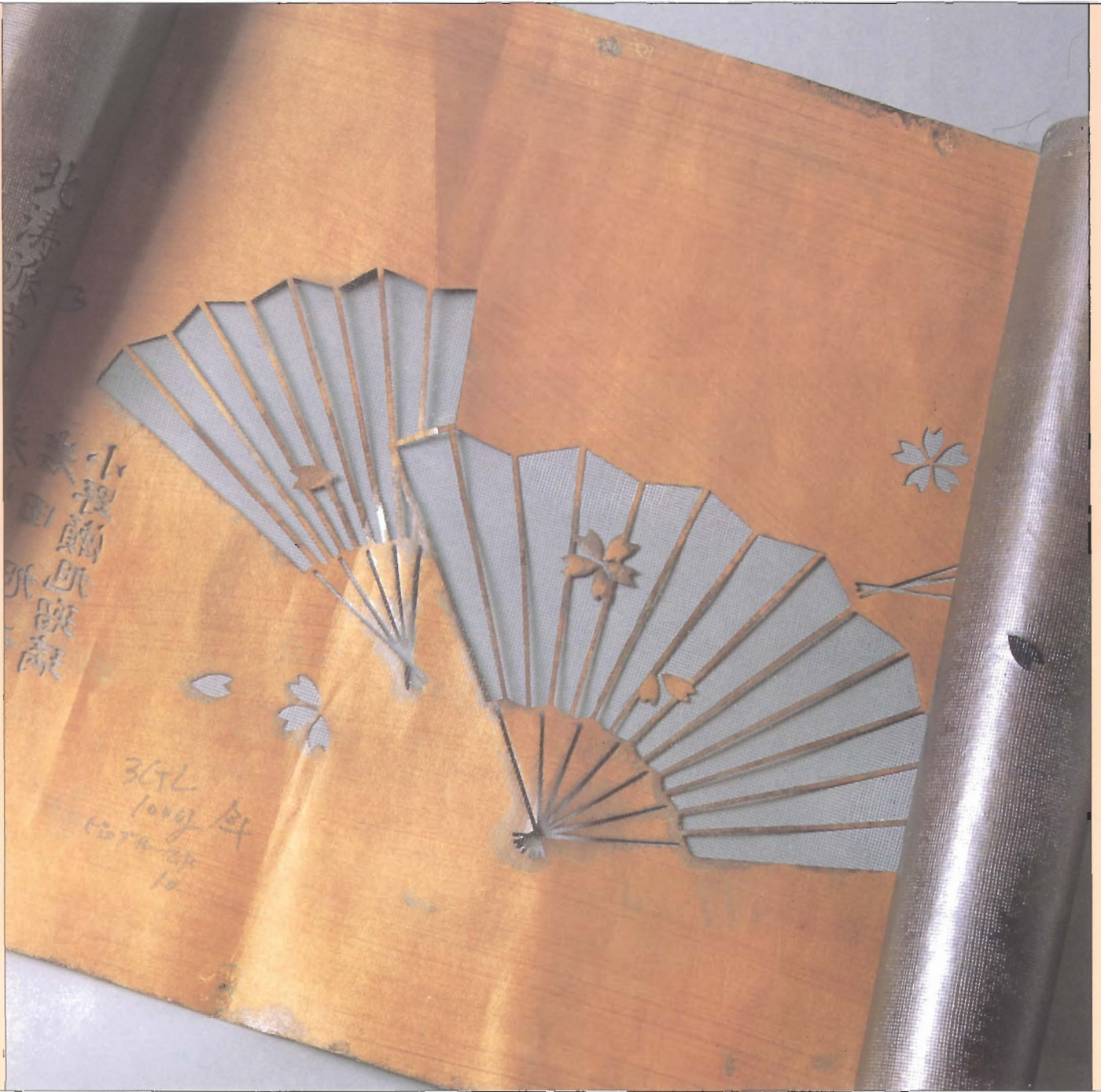
練るという作業は、木綿にふくらみという風合いを与え、染料の吸収をよくさせるための欠かせない工程です。

生地に着着している不純物を、硫酸を使って水洗いします。天日で乾かします。乾燥機ではいけないのですかとお聞きしたら、生地をかたくさせるだけですといわれました。太陽の恵みは大きいのです。

今、染めは折付染と呼ばれる新しい手

ぬぐい染色技法が開発されて、ほとんどがこの洋染で染められています。その前はつまり、江戸の頃は長板本染、または長板藍染といって、三間半の長板に晒を張り、小紋形（30番位）をおくりながら、画面寸分の狂いもなく糊付が形付の専門職の手によってなされ、藍甕紺屋に渡すのが普通でした。現在は化学藍、バットと呼ばれる建築染料です。

T
E
N
N
U
G
U
I



75 < 11

板場糊付一筋

折付注染が新しい技法とはいえ、明治の頃より受け継がれているのです。職人さんはやはり、昔のように黙々と働いています。

注染の前に板場とよぶ糊置きの仕事があります。手ぬぐいの長さに折りながら、木枠に貼った形紙を謄写板のように下して、木べらで糊置き（板場さんが柄、染色によって、糯米粉に海藻粉に防染剤、他を調合し、煮て作ります）をします（写真左）通常一疋（二反分、一〇枚）、一枚分の晒を糊付けして折り重ねていきます。

初めから染色の道を志したという、この道30数年の渡辺さんは、いかにもリズムカクに糊付けをこなしているのです。

紺屋染めはまず、いい色を調合し、裏表きっちり注染する

いよいよ染めに入ります。昔ながらの呼び方で紺屋といえます。板場の渡辺さんとはほぼ同期でイキの合った仕事をみせてくれる鎌田さん（前頁右）の出番です。

今、手ぬぐい染色の基調色は藍であることは昔と変わらないのですが、華やかな赤系茶系と色調は豊富です。それは化学染料の開発が基本にあつて、新しい技法が（折付注染）生みだされたといえます。

幕末に化学染料の流入がありました。これを倉密染と呼び、手ぬぐいではなく、一部の染色に使われていました。維新後に印度藍（天然）が輸入され、代々の徳島の藍

作農家が大打撃を受けるといふこともあり、いよいよ化学藍（硫化染料）が、



日光だけで晒を練ります。風にそよぐ白無垢は何色に染め上がるのでしょうか。



手ぬぐいの長さに折りながら、形紙を謄写板のようになして糊置きします





水元「水洗いによる糊落としをしっかりとしなまきや

いい色はでない

工場の中の細長い水槽にはきれいな水が流れています。まるで川のようなです。ここでしっかりと糊を洗い落しながら、水中、空気中の酸素で染料を徐々に酸化させます。水

にくぐらせ、何度も何度も洗っているうちに色がでてくる様子がよくわかります。洗っては手ぬぐいの長さに折りながら、また洗うのです。やはりこの道一筋の水元さんの動きにムダはありません。真冬、つまり暮れからが手ぬぐい染めの最盛期です。足元まである長い

ゴムのエフロンをきっちりしめて、寒い様子も見せない職人さんの姿に胸が打たれます。

束ねられた一定分の手ぬぐいは脱水機にかけられ、乾燥に入ります。最後に検反の仕事がされて、発注元に運ばれます。

何気なく使われている手ぬぐいにこんな

にたくさんの手間とマがかけられているのがよくわかりでしょう。

ここで、弥次さん、喜多さんでお馴染みの『東海道申蓑』から「手ぬぐい」の「エピソード」を、小田原の宿で上方風の五右衛門風呂を知らない弥次さんが浮いている風呂を取らそ失敗するお笑い「弥次「チャイ水がわいたかドレはいりやせうトすぐ手ぬぐひをさげ」この手ぬぐいは宿の手ぬぐいではなく白前です。江戸時代の旅の七つ道具に手ぬぐいは必需品、少なくとも二本以上は用意したということです。

臆病な喜多八が弥次さんの手ぬぐい被りと青色に狐と思いきみ油を絞られる滑稽や、日中の日除や埃よけの被りもの、振分荷物を束ねることもでき、病いときは額を冷やし、けがのときにはほうたいに、文様や色によっては、つれの目印にもなったという多様さです。水元さんの真剣な表情を見ているうちに、弥次さん、喜多さんを思い出すのはおかしいでしょうか。

検反「生地巻、シワのばし」の作業は

忘れてはいけない

「正分の手ぬぐいがきれいに巻かれます。厚い一枚板の台にのせられ、手際よく検査をしながら、キズがないか、染ムラがないか、一枚一枚目を光らせます。この時、あめ色をした竹尺で手ぬぐいを交互に折ってゆきます。竹尺が竹べらのような役割をして手ぬぐいをのばしてゆくのです。一定、反すつた山がすぐできます。昔は裁断して一枚ずつたんだでは袋に入れていたそうで



厳しい目でチェックする検反作業です。一枚一枚平らにのばされながら完成してゆきます。一枚板の台の中央は自然にすりへっているのに驚かされます。

ですが、今は検反作業までで完成ということになります。

切っていないければ、洋服生地として、おもしろいデザインができそうです。川上桂司氏の手ぬぐい展覧会ではブラウスをほじめ、スーツやベストになって、木綿の染ざれとしての扱い方に脱帽しました。松葉や小梅あられなどの江戸小紋は、直線裁ちでモダンになればなるほど素敵です。

のれん、鏡台掛け、風呂髷屏風、襦袢等。工夫次第でインテリアとしてもおもしろい。手ぬぐいの洗濯は、ザブザブ洗って、ハンパンと手でのばせばすっきりしますが、水でも汚れがおちるといふ強い洗剤（塩素含有率が高い）は、染料によっては色が落ちてしまう恐れがあります。色もの場合は白い洗濯物と一緒に洗わないとかして、ちよつと気をつけたいものです。品質のいいものなら、年洗つても色が変らないといわれますが、ほどほどにどうぞ使いつんで晒された手ぬぐいを、アイロン掛けや、ガラス拭きにしたら最高のものを存じますか。ちよつと身近に置いてみて下さい。自然素材の良さを再発見します

ギフティングブック

GIFTING BOOK

ポスト・モダニンのファッション・アイテム
これぞレトロの代表、ハイ・タッチの典型！



手ぬぐいの本

オンテスグイカタログ
御手拭型録

THE TENUGUI

東京・神田・三省堂・謹製

ギフティングブック

定価 1,800円 ISBN4-385-34930-4 C0077 ¥1800E